

刷毛

手づくりの伝統生かし 多様なニーズに対応

甚目寺町

と同様、中国からの安い製品などに押されて需要が伸び悩み、後継者問題も深刻になっています。



混ぜ合わせた毛を金ぐしで丁寧に整え(右)、目方を量って紙で巻き、柄にはさみます(左)

ぐしによる整形から、柄に穴をあけ、針金でとじるまで、細かな作業が多く、今でもほとんどが人の手によるもの。業者の大半が家族中心で、女性も大切な働き手です。

「生き残っていくには、

素材や組み合わせをさらに研究し、大量生産ではできない、プロの職人さんの要望にこたえられるものを作り続けることが大切」と愛知刷毛刷子商工業協同組合(47)の洋菓子の名店が多い神戸でも、この地区の仕上げ用の刷毛は高く評価されているとのこと。また、地元の小中学校で講座を開くなど、若い世代に向けての活動にも力を入れています。

愛知刷毛刷子商工業協同組合・事務局(052・444・0370)、ホームページ <http://www.aiweb.or.jp/hake/>

刷毛の生産高が日本一という甚目寺町。近隣の七宝町、美和町も含め約50の業者があり、国内生産量の6割を占めています。

一口に「刷毛」といっても、塗装用、料理用、表具用から工業用まで多彩。使用する毛も、やぎ、豚、馬など様々で、それぞれの部位でも硬軟や感触が変わるため、用途によって多様な組み合わせが見られます。

毛をそろえ、柄にはさみ、固定するのが大まかな流れですが、毛の裁断、金



扱う毛の種類も、製品も多彩